神奈川県現代俳句協会会報

第171号
令和8年3月発行

令和七年度（第四十二回）
神奈川県現代俳句協会俳句大会　記念講演

「吟行の奥行き」　星野　高士　講師

令和七年十一月二十三日（日）
於：神奈川県民センター

星野高士　先生

第四十二回神奈川県現代俳句協会俳句大会のご開催まことにおめでとうございます。やはり続けていくこと、「継続は力」とよく申しますけれども本当にそうです。こういうことをやりながら、みなさんの近辺にある俳句、こういうものをどう確立させていくか。どうレベルを上げていくかということが、俳句をやってる者として一番楽しみなことです。俳句というのは、私は生きてるんだと、生き物なんだということを常々言っているわけです。そこをどう自分が通じていけるか。生き物というのはコロコロ変わりますから。作って、話して、鑑賞していてもちょっと変わってくる。こういうところにまた俳句の良さがある。決定したものじゃないんです。日々変わるわけです。そういうところにまた俳句の奥深さがある。

今年は私もいろんなことがあったんですよ。ともかく現代俳句協会の副会長になったということ。これは私にとってみるとちょっと青天の霹靂なんです。プロフィールで「現代俳句協会副会長」っていうと「ええっ」って言われる。それくらいちょっと不思議なんです。私にとっては必然であるというふうに理解しています。これは今の高野ムツオ会長は、まあいろんな意味で二十年ぐらいのお付き合いしています。お互い違ったところで、立場で俳句を作ってる。いろんなところで俳句語ろうよということで付き合っています。十年ぐらい前だったかな、「俳句四季」という雑誌で、その選考委員を高野さんと一緒にやってた。七、八年たったころかな、そのころはまだ高野さんは会長さんじゃない。終わってから飲んでたら、「星野さん、そろそろ現俳に入らない？」って高野さんに言われた。私は「おもしろいな」と思った。私はその頃、伝統俳句協会、もちろん今も所属しておりまして。どちらかというと私がやっているのは、さっきもご紹介にあったように「ホトトギス」の系統。系統っていうか、血統。あれがどっちかっていうと前衛とか現代俳句とちょっと違う。「伝統俳句」。僕は「伝統俳句」という言葉はどうかなと実は思ってて。俳句は伝統に決まってる。しかしながら私もいろいろ伝統俳句とか、うちの「玉藻」とか、いろいろなものを背負っているので、会員の方たちがどういうかというのはちょっと疑問だった。「現代俳句協会っていったらまだ主宰、早すぎますよ」って却下されちゃった。「高野さん悪いけど、こういうことでまだちょっと時期尚早だ」と。今回の話はなかったことにしてくれって、高野さんにそう言ったら「そりゃそうだろうね」って。そうなら誘わなきゃいいのに。

そして十年ぐらいたって高野さんが会長になって連絡が来まして、「星野さんまたぜひ考えてくれないか」って。考えなくても私はもう「入りますよ」と。入るっていったって新参者だから平会員でいいですよって。ところが一週間ぐらいたってまた電話かかってきて、現代俳句協会の方がみんなで緊急理事会開いて、星野高士が入ってくるけどどうしようって、平会員でいいって言ってるけど。平会員ってわけにいかないだろうということで、副会長にしようって、いきなり出世しちゃった。そういう経緯がありまして、現代俳句協会副会長という肩書をいただいて、なんとかいろんな意味の復活復興。私も今年は北海道行ったり九州行ったり、いろんな所に行っていろんな方に会いました。行く先々でやっぱり避けられないのが高齢化ですよ。日本の寿命というか、人生百年までといわれている時代でありますけれども、俳句は一番高齢化に適してる。あんまり階段上がったりしないしね。適してるというか、だんだん俳句はよくなるんじゃないですか。僕は短歌の方とか川柳の方といっぱい交流がありますけど、どちらかというと短歌の人は二十代、三十代の頃、悩み事相談みたいなのが多い。それが五七五じゃ言えないから、七七が付いちゃってる。みんなが感動していいねっていう。俳句は短いからそんな悩み事言ってられないでしょう。季語があるから、季題

トピックス

第42回俳句大会記念講演録

諸家近詠

「湾岸大賞」募集

サミット短信

湘南吟行会報告

春の一句

が。私のやっている「玉藻」は創刊九十五年です。この間「水明」が九十六年ぐらい。「ホトトギス」はもう百十年ぐらいで、あれは世界で一番古い月刊誌ですね。ギネス。でもやはり会員減とか、増える方もいるし、若い人たちもずいぶんいますが、私も松山の俳句甲子園で二十年近く審査員やってますけど、卒業して、いろんな優秀な連中をみてます。終わってやめちゃう学生も多い。いっときの燃焼型になっちゃってね。これ以上もうないんじゃないかって。また何年か経ってやる人もいる。でも人口的にはそう増えませんよ。結社としての存続もあるし、大きな意味ではいろんな協会。会員さんあってのことなので、こういうことやってられるのもね。それでなんとか私も現代俳句協会副会長、神奈川県の支部大会、いろんなところでいろんなものを発信できればなと思っています。私のことばかりになりますけど、今ひと月に、数えるのもいやだけど、二十五、六回句会をやってるんですよ。でも飽きないんだね、俳句っていうのは。好きでやってるからね。みんな私が倒れちゃうんじゃないか、大丈夫なのこんなにって。その他に選句とかマスメディア、いろいろやってるので、時間がないんですよ。じゃあなんでそんなにやるのと。さっきも言いました、やっぱり俳句の会があるから作る。俳句の会がなかったら、作らないかも。頼まれたりして作る。やっぱり俳句会があれば、何時何分が締切で、自分がそれにスイッチを合わせて作る、そして作れるということ。ですからこれ以上は増やせませんけどね。これ以上は増やせないけど自分の表現というもので、なにか伝えたいなというのはあります。そういう中で私は、今日のタイトルにもさせていただきました「吟行」。吟行は、私がひと月に二十五、六回やっているなかで六、七回やってます。吟行というのは非常に自分を鍛えてくれると思います。定期的にやってる吟行というのもいっぱいあって、月六、七回やってるから。神奈川県のなかでいえば、もう二十七年やってますね、横浜の三渓園。僕は三渓園が大好きで。「ホトトギス」の有力会員が横浜にいっぱいいたので、あの聖地に高浜虚子の句碑が立ってる。あそこに池があってちょうど向こう側にそういう句碑があるところです。そこに私は毎月行きます。でも行くたびに違うんですよ。同じところ行って毎回同じもの見ていいものができるのかと、それはわかりません。でも行って、例えば今ごろですとちょうど鴨が来ているんですよ。鴨が来ていると一か月後行くと何もいなくなってたり。また増えてるなーと思ったり。そういうところを俳句にする。これが吟行の醍醐味だと。ところが吟行にもいろいろ落とし穴がある。俳句の落とし穴なんてのは命取られるわけじゃないから問題ない。でも見すぎちゃって、あれもいってる、これもいってるというところで、なんとなく自分の日記っぽくなっちゃうんですね。これが一番難しい。三渓園行って、池見て、虚子の句碑みて、お蕎麦食べて帰ってきたよ。これは日記ですよ。だから日記というものを脱するために、どうするか。吟行だけでは今度はだめで、じゃあ何があるんだろう。今度は「題詠」ですね。例えば今日みたいに題を出しました。今日はどっちかっていうと席題ですね。その当日に題を出す。兼題っていいますね。これはひと月ぐらい前から題を出しておいて、みんながそこを目指して作る。頭のなかで割合想像して作る。ところが吟行というのはその場で作る。手ぶらで行っていい。予備知識ぐらいはほしいですけどね。手ぶらで行ってよくて、そこで見たものを作る。ところが三渓園行って、今日はちょっと池の波が荒いなとか、そんな発見がある。ちょっと裏に行ってみたら三重塔がちょっと曇ってたとか、そういうのが発見。兼題とか席題でそれが浮かぶか。その情景をどこで皆さんが自分の頭に入れてるかどうかだと思います。ですから吟行ということはそういうことを含めて、そこの場でもいいのができるかわからない。全部だめだったとしても後で、兼題とか席題のときにふっと浮かぶことがある。昔行った北海道のオホーツク海見て、あの時は句にならなかった。しかしながら何年か経って、例えば「霧」なんて題が出たら、「オホーツク海に霧が立ってたな」って、それを俳句にする。二、三年経ってやっとそれができたっていうことがあるんです。もう一つ「旅吟」ね。俳句は旅だっていうのは、芭蕉も言ってました。吟行っていうのは、読んでいただくとわかるように「吟」が先なんですよ。でも最近の人は「行吟」になってる。仲良し友達が会って「久しぶりね」なんて、「終わったらごはん食べましょうよ」って。「吟行」というのは「吟」が先で「行」は後、それだけ覚えておいてもらえれば。ただそんなこと言っても堅苦しいから、句がよければいいですよ。後で句がよければ、その人は良かったねということになる。句が悪いとそういうこと言われる。そういう意味で吟行というリアルな場面、だって朝、雨が降ったとか晴れてたとかわからないじゃないですか。今日は朝は天気だったけど時雨てきたなって、わからないじゃないですか。俳句にあいにくはないっていうでしょう。雪が降ったって俳人は来るわけですよ。そういう意味で、吟行というのはどんどんやるべき。

吟行の奥行きということをちょっとお話したいと思います。これは吟行というものの最たるもの、一番最初にこれを始めたのは高浜虚子なんです。高浜虚子がやり出したのが、正式に発表したのが昭和五年八月。これが「武蔵野探勝会」ですね。多摩地区の方も今日みえてますね。武蔵野というのは、この辺もそうですよ、広い意味の武蔵野。そこを歩こうじゃないかと、それを始めたのが昭和五年八月。第一回が府中の大國魂神社。昭和五年から始めて五年間で、百回やりましたね。当時、

本当にあの頃も交通の便がないんですよ、読んでるとね。もちろん電車とか公共交通使って行くんだけど、なかなか今みたいにぱっといかないわけですよ。そんな中であれをずっとやってた。あれ僕はやっぱり虚子が、「吟行」というものがやっぱりいいんだということに、昭和五年に気づいたんじゃないかと思います。なぜかというと、それまでは何をやってたか。それまではさっき言った題詠、席題で集まって句会をやってた。ところが正岡子規とか、あの頃は子規はもう病気だったし。その頃を考えますと、男しかいないわけです。女流が、今日は七十パーセント女流ですけど、女流の人はその頃いないんですよ。一茶がちょうどこの間１９９回忌だっていってました、来年は２００回忌で大イベントやるって言ってましたよ。石川の金沢の白山市からきた連中がいて、うちは加賀千代女が２５０回忌だって。今でも俳句大会やってるんだよね。うちのお袋も選者やってる。あの頃女性で芭蕉と並んでたっていうんですね。〈朝顔につるべ取られてもらい水〉、あれがすごく評価されて、一発屋ですよ。あの句で２５０回忌。一茶はたくさんありますよ。ですからそういうことを踏まえて吟行をやってたわけで、昭和五年。ところがその前に、虚子は吟行らしいことをやってる。これが僕は面白いと思います。それは大正五年ぐらいに、虚子がみんなでどこか行って作ろうよという話をしたんですね。それをやったのが大正六年で、まだ「吟行」という言葉はなかった。「旅吟」みたいなものですね。高浜虚子がすごいと思うのは、名前を付けちゃう。「吟行」というのは虚子が言った。虚子の手柄ばかり身内が褒めてるみたいだけど、みんなも認めてると思いますけど。今やってる俳句雑誌、おおよそ「雑詠」って言ってるでしょ、投句用紙に。あれも虚子ですよ。なんでもいいよ、一年間なんでもいいよというのが「雑詠」。その頃のこと読みますと、大正五年の巻頭ページは「甲州吟」。山梨の甲州。その前に茨城の大洗に行ってるんです。大洗に行ったときに「大洗記」ってなってる。「大洗吟行」でしょ、今でいうと。でも「吟行」っていう言葉がないから。

　そのころ一緒に行った人は前田普羅、下村為山、池内たけし、原石鼎、長谷川零餘子、そういう人たちが輪番で行って、加えて平福百穂が絵を描いてる。その人たちがみんな大洗に行って俳句を作るということで行っている、それがはじめ。そして会を重ねて、甲州に行って、今度は美濃に行くんです。そこにいって初めて吟行の句を虚子が発表している。その句がここには載せられなかった。最後の一句だな、レジュメの最後の一句をみてください。〈木曽川の今こそ光れ渡り鳥〉です。これと、ここには書けませんでした、同じ時に〈おおぞらにまたわきいでし小鳥かな〉という句があります。これは「小鳥」が季題。木曽川のところで詠った句です。まさに見て作ってる。見たというところで虚子が作ってる句なんですね。ところがちょっと面白いのは、〈木曽川の今こそ光れ渡り鳥〉となっていますが、虚子が当日作った句はあとで五百句を作った時に直してる。〈木曽川の今こそ光れ小鳥くる〉が最初で、推敲して作ってる。我々ならそのままになるんだけど、直してる。吟行の句っていうのはできたてで、まだちょっと荒い。それをどう自分で調整するかということ、それは非常に難しいですね。その最たるものが芭蕉の『おくのほそ道』でしょう。あれは旅吟ですよ。旅吟だけれども、当時、吟行という言葉はないけれども、行ったところで作っている。ところが芭蕉もあれ四、五回直してますからね、後で。あとで全部訂正して紙貼って直して、完成版まで時間かかってるんです。虚子もそうですけれども、吟行句というのはそのぐらいまだ完成度にはいっていない。ところがその吟行句をあんまり手直しするとまた変になっちゃう。皆さん経験あるでしょう。吟行句をそのまま持ってればいいんだけど、直してよくなることもあるけどね。直してよくなるのは、俳句の場合は70パーセントぐらいじゃない、もっと確率低いかな。やめとけばよかったのにっていうこと多いですよ。そういう意味で吟行の句は脆さもある。脆さもあるけど、刃のようなときもある。その刃をパッと摑む。それを養うことですね。高浜虚子が吟行のよさに気づいた、それからずっと吟行をやってる、それが「武蔵野探勝会」です。「武蔵野探勝会」というのは、非常に虚子にとっては一大行事ですね。行くだけで大変なんです。それでも三十何人の方が参加して、素十がいる、草田男がいる、秋櫻子、それから女流では中村汀女、星野立子。あるいは虚子の長男の高濱年尾、池内たけし、鈴木花蓑とかね、山口青邨もいるんだから。富安風生、こういう人たちが集まって歩いてるわけですよ。そんな人見かけたら大変なことになるけど、そのころはまだそんなに頭角表してないんだよね。ですけど、異常な集団だったと思います。そういうのが集まってそこで句会をやってる。「武蔵野探勝」って面白いのは、原則日帰りなんだってね。泊まりはなし。一回ぐらい新潟行って泊まったりしてるけど、みんな日帰りできる範囲でやってた。武蔵野ですからね。虚子先生も一緒にいて歩いて、そこで作るわけだから。虚子がどんな句作るんだろうと。素十がどんな句作るんだろうと。これは大変ですよね。だから高浜虚子がそれだけやってたというのは、私は、高浜虚子がずっと正岡子規からやって、碧梧桐とやり、それから「ホトトギス」の第一期黄金時代があり。これは男性ばっかり。その頃に飯田蛇笏、前田普羅、原石鼎、そういう人たちが名前を並べてやってる。そのころはずっと雑誌での投稿ですよ。会うことはあまりできない。だから「武蔵野探勝会」なんて五年も、虚子が歩いて、

そして実体験をして作ってるというところの凄さを改めて思います。その中でいろんな人の俳句がたくさん生まれています。レジュメに主だった人の句を書いてきました。

いと長き刈藻つぎぐ流れけり　高野素十

私の好きな句です。これは昭和六年、みんなで古利根に行ってるんですよ。埼玉の春日部に行って。今私は春日部の句会に月一回、十年ぐらい行ってます。この人たちの句板が利根川沿いにできています。句碑じゃなくて、石に刻まれた板の。武蔵野探勝の頃の句が見られます。高野素十はどちらかというと写生ですね。虚子が非常にかわいがっていた。さらっと読んじゃったけれども、なんか場面が見えてくるんですよ。状況が。そういうところがやっぱり吟行のよさ。素十は新潟医大の解剖学博士です。豪快で酒のみで大変な人だったっていうから、一世を風靡して。いまも素十の人気は絶えませんよ。なぜ絶えないか。やっぱり吟行のこういうリアリティのある句が多いんです。たとえば〈甘草の芽のとびとびのひとならび〉、これは皆さんよく知っている句です。よく見てるっていうことです。吟行とか写生というのは、虚子も言ってますけど、穴が開くほど見ろって言ってる。そういうことをやってるわけですね。ですから素十なんかもそこで花開いたんです。次は水原秋櫻子です。

泳ぎ子の這入りし垣の葵かな　水原秋櫻子

これはちょっと年代がわからないんだけど、武蔵野探勝でね。「葵」が季題ですね。泳ぎ子も夏ですけど、このころは季重なりとかあんまりうるさくなかった。句が良ければいい。これは「葵かな」なので「葵」の方なんです。秋櫻子もそういうところを経てだんだん自分の世界を持っていく。おもしろいのは素十と秋櫻子が一緒に吟行していた。その後素十と秋櫻子は虚子のもとで袂を分かっちゃうんです。素十は「ホトトギス」で研鑽を積み、いろんな作家を生みました。秋櫻子はご存じのように昭和六年かな、「馬酔木」を出している。そしてそこからすごい作家をたくさん世に出す。〈滝落ちて群青世界とどろけり〉という句もあります。ああいうのをみると、やっぱり素十も秋櫻子も、虚子のところで、吟行で、武蔵野探勝で鍛えられたわけですよ。

川べりに樹木園あり猫柳　鈴木花蓑

鈴木花蓑、これは本当に「ホトトギス」一辺倒で、虚子の信奉者で、「写生の鬼」って言われた人です。本当にどこか川べり行ったら、武蔵野って樹木園がたくさんあるんですよ。そこに猫柳がある。それだけのことなんですよ。ところが詠い方がうまいんですよね。「川べりに樹木園あり」と、韻を踏みながら、そして川べりというちょっとしたやさしい場所、そこに樹木園。猫柳は二月ですから。猫柳もそこに芽を出して、なんとなくそれを囃し立てるようにやってる、そういう句だと。これも鈴木花蓑という吟行の名手と言われた人の句です。

枯野道はるかに人のよぎりけり　今井つる女

知ってるかな、今井つる女っていうのは、虚子の姪っ子なんです。この方のお嬢さんが今井千鶴子さん。ついこの間、今年96歳で亡くなりましたけど、その娘さんが今活躍している今井肖子さん。これは昭和七年、国分寺の作です。枯野道をただ人がよぎったじゃだめなんです。「はるかに」って言ったから距離感がある。これが吟行なんです。「はるかに人がいる」というところで、枯野道と人の距離感、自分との距離感、それが出ます。

初春の氷川土産はまねき猫　赤星水竹居

高浜虚子が発行所を東京の丸ビルに置くんですね。あの丸ビル、三菱地所ね。虚子が丸ビルに発行所を置きたいって言って、断られて。断ったのがこの人なんです。三菱地所の当時の偉い人で、なんで断ったかっていうと、俳句雑誌が家賃なんか払えるわけないだろうって言って断られちゃった。高浜虚子のすごいのはそこで、実は私のところはお酒も販売しますよと。なんでかっていうと、虚子が名付けた「小鼓」っていう日本酒があるんですよ。丹波篠山の。その発行元をそこでやりますと。家賃をそれで払いますと。それで借りれた。なんで丹波篠山かっていうと、その酒蔵に西山泊雲という人がいて、これは酒造り屋の主人で、虚子を一番面倒みていた人です。赤星水竹居という人はそのときに断ったんだけど、なんか虚子が好きになっちゃって、弟子になっちゃった。そしたらこの人が後の社長なんです。

夕ざれば誰も居らざる辛夷かな　山口青邨

山口青邨はこの武蔵野探勝、だいたい毎回ほぼ出席で作ってた。だから山口青邨という人は本当に虚子の高弟という人で、ずっとつながってますね。だから山口青邨のところの人はやっぱり吟行なんです。深見けん二さん、黒田杏子さん、斎藤夏風さん、それから有馬先生ね。青邨のお弟子さん。

花莫蓙を敷いてくれたる百姓家　池内たけし

池内たけしというのは僕大好きだった。池内たけしは虚子の甥っ子なんです。松山の人で、虚子が東京に連れてきて、「ホトトギス」発行所を手伝ってもらってたんです。非常に地味な人で、俳句もそんなに派手なものがない。彼もその時言ってたけど、〈仰向けに椿の下を通りけり〉、これ有名な句です。「花莫蓙」って題じゃできないでしょう。行ってみたら花莫蓙が敷いてあって、そ

して百姓家がそこにあった。見ただけの景色だけど、風景が浮かんできますよね。言葉で吟行の場面をみんなに伝えるという、かなり大変なことをやってる。そこに当然季題があって、季題が入って、そこに結び付く。ある意味では吟行というのは、どんどんやっていくと、題詠とか席題を凌駕するような句ができると思います。これは次の句を読むとわかります。

冬の水一枝の影も欺かず　　**中村草田男**

有名な句です。これを草田男が武蔵野探勝会で作ってるんです。吟行で作っているようには見えませんよね。冬の水だけを見てるような感じだけれど、そこに一つの枝が影を落としている。これは国分寺、深大寺とかあのへんに行ったからできたわけです。そこへ行ったからできた。行かなかったらこの句は生まれてないんです。〈まさをなる空よりしだれざくらかな〉、これ富安風生の代表句でしょう。これも武蔵野探勝会で作った句です。

大仏の冬日は山に移りけり　　**星野立子**

最後に立子の句をご紹介します。これも「山へ」じゃなく「山に」。

遠山に日の当たりたる枯野かな　　**高浜虚子**

これも虚子の吟行句です。

吟行というものをこれからも、もう少し力を入れて、日記に終わらないで作っていければと思います。その秘訣はいろいろあると思いますけど、いろいろなところでご紹介していければと思います。みなさん今日は暖房の効かない部屋でしたが、少し汗かいて来たかな？　ご清聴ありがとうございました。

テープ起こし：山戸　則江
編集文責：杉　　美春

諸家近詠（到着順）

ぺらぺら　　なつはづき（豈・青山俳句工場05・天晴）

啓蟄やにゅるっと落ちるハイソックス
ぺらぺらな約束をして夏至の月
二百二十日アラビア文字のように草
薬箱はわたしの鏡もがり笛

春夕焼　　三沢　容一（無所属）

磯釣りの人を影絵に春夕焼
夜濯やぽつんと出たる独り言
野の花は野仏のもの曼珠沙華
私生活少し見せたる干蒲団

あるがまま　　長島喜代子（無所属）

消印を手掛りにして燕来る
よく歩く昭和生まれの夏帽子
反骨は反骨としてとろろ汁
指先でなぞる旅です堀り炬燵

無題　　勝　烏（無所属）

待ちわびし初水仙のあどけなし
白牡丹おまへ抜き足おれ差し足
もどかしや我が種植ゑの秋桜
水仙の姿我が背を糺しをり

草ひばり　　池田恵美子（あかざ）

新旧の撫牛のをり梅日和
子沢山の不平不満やさくらんぼ
裏木戸の小さき間口草ひばり
乾麺の吹きこぼれたり除夜汽笛

たひら　　竹本　典子（滝）

水たひら国たひらなれ蝌蚪生まる
焼かんとす魚のひと腹聖五月
数珠玉や蝮注意の文字が怖
暖房の犬に点滴できる国

鰊群来　　伊藤　眠（雲）

大ばあは礼文の姫よ鰊群来（にしんぐき）
冷酒やにはか雨なら蕎麦二枚
大山の上に富士浮く秋日かな
寒北斗掬ふものなき濁世てふ

仏　　浅　太郎（天籟通信）

九品仏横並びして春萌える
夕闇にしらぬがほとけ女郎蜘蛛
秋口に烏滸がましきや高山寺
石仏に久遠の流れ寒鴉

花言葉　　佐々木信夫翁（百鳥）

それぞれの指すり抜け花の塵
凌霄や野獣派の筆冴えにけり
寄り道は彼岸に一歩曼珠沙華
影からは逃れぬ運命水仙花

凍蝶　　市川めぐみ（顔）

八十路より遙かに生きて春を待つ
合鍵がふたつあります栗の花
中流の顔して銀杏を拾う
凍蝶を安全ピンで止めておく

青ぶどう　　米田　規子（響・焔）

干して畳んで晩春のふくらんで
少女期の翳を濃くして青ぶどう
鬼の子とこたえの出ない問題と
三人の都合が合わぬ花八ッ手

文芸論　　保里よし江（青山俳句工場05）

甘えたい風にだけ揺れ雪柳
蝉しぐれ耳笑うほど髪切って
深酒につき合う覚悟つづれさせ
すきやきが牛鍋になる文芸論

開戦日　たむら　葉（無所属）

まだ温き産みたてたまご春の雪
衣更へて弥陀よ鞘堂出でたまへ
隣り合ふ薬舗三軒望の月
皮ジャンにゆるる鍵束開戦日

地球　金栗トモ子（ロマネコンテ）

地球いま四角い平和蜃気楼
沙羅双樹生まれ変れるものならば
月光のあまねく照らす新世界
地球星疲れましたと冬眠す

弁明　瀬戸　正洋（無所属）

和蘭芥子月に一度の自暴自棄
一問一答疑心暗鬼をしてをりぬ
弁明や他人行儀な秋の蝶
初時雨自称エコノミストと珈琲

違和感　麻生　明（無所属）

源流の水ぽよぽよと花曇
雷来るぞ来るぞと雲が走りだす
母の忌や西瓜に種のない違和感
隆々と空き家の庭の霜柱

四季の句　小林　梢（茅ヶ崎しんじゅ会）

春雨に傘掛けられし遙かな日
夏兆す伝わる鼓動新樹かな
秋彼岸灯火に揺るる遺影かな
冬支度吾れ寿今年また

自由　若林つる子（無所属）

たんぽぽの絮に自由かと呟く
聞くだけの世事や身巾の団扇かぜ
濁点の多きよ秋の橋わたる
顔のない人が行き交う街師走

赤のまま　里見　美季（無所属）

乗り遅れもうひと駅を木の芽風
捩花を逆にねじってエジソンは
ありのまま言って嫌われ赤のまま
失恋のよう手袋の右落とし

くらげのくず　ドゥーグル（無所属）

土葬禁止土器なる壺の冴返る
マラソン了へ空蟬と樟に樹凭り
曼珠沙華僧の固まる自撮り棒
しぐるるやくらげのくずのなほおよぐ

ガラスの回転扉　原田もと子（円錐）

門に待つ母へ掲げる桜餅
夏服を入れるガラスの回転扉
工場の燈及ぶセイタカアワダチサウ
楽器函孤島へ渡る十二月

自分　吉田　典子（歯車）

本能がひとり歩きをする春泥
まだ助走夏は本気を超えている
コスモスに選ばれた笑顔が遺影
冬に入るどの自分にも合わぬ靴

枯野　伊藤　梢（歯車）

ドンペリに無縁の暮らし春立ちぬ
誘惑の蛍袋の白い闇
行列の中に神馬も秋祭り
たましいの飛び立つまでを枯野ゆく

五十歳　金子　泉美（祭演）

げんげ田の原風景に蝶死なん
ぷる、ぽるる、空を飛び立つ梅雨の精
夜の秋部活帰りを撫でる風
石蕗の花角を曲がれば五十歳

創立45周年記念事業実行委員会より
神奈川県現代俳句協会創立45周年記念
《湾岸大賞》作品募集

創立45周年（令和９年）の記念事業の一つとして会員の優れた作品を顕彰する為に恒例の「湾岸大賞」を募集します。清新で現代俳句として残せる意欲ある作品の応募を期待いたします。

【応募規定】

①神奈川県現代俳句協会会員（正会員・会友）の作品であること。（但し選考委員は除く）
②未発表作品20句
③ワードＡ４・４００字詰原稿用紙設定を使用。（市販原稿用紙に手書でも可）コピーして選者に送るため**楷書で丁寧にお書きください。**右欄外に**題名**を記すこと。
④**別紙**に氏名・郵便番号・住所・電話番号・メールアドレス・所属結社を記すこと。
⑤参加費　２０００円を作品に同封のこと。
⑥締切　令和９年２月末日

【入選発表】

令和９年９月
神奈川県現代俳句協会会報にて発表

【顕彰】

令和９年の創立45周年記念大会にて湾岸大賞受賞者には賞状と賞金５万円。僅差で次席の場合は準賞を設け賞状と賞金３万円を贈る。

【投句先】

〒236－0005 横浜市金沢区並木３－７－４－１１０４
湾岸大賞事務局　平田薫
０４５－３５２－７６９５

記念事業全体の内容は別途ご案内致します

サミット短信

辻堂句会

奥村　純子　報

於・明治市民センター
令和7年11月29日

第三二四回

楷明かり宿の民話の佳境なり　田畑ヒロ子
躊躇して三年日記戻り買う　若林つる子
木枯しやきみの襟足ナフタリン　柳　蒼柳
曇天や鴨上戸実の明り　生田　暁美
冬紅葉して根本中堂の祈り　伊藤　梢
この道を行けば鎌倉照紅葉　岩田　信
銀杏散る光の道で会釈する　占部美士子
天邪鬼同類ですと狢言い　金栗トモ子
古墳丘に寒禽の声透きとほる　佐々木重満
冬紅葉立ち去りがたし二条城　田辺かつら
目がさめて生きてる実感ゆりかもめ　長島喜代子
風一陣いちょう黄葉の渦となる　平山　圭子
厚着して恙無き日の蕩けゆく　星　由江
漂流の雲に減り張り冬の音　吉田　典子
インフレを燃やす輩よ石榴割る　渡辺　正剛
釣果見せ語る漢や落葉掃く　奥村　純子
◎連絡先…事務局佐藤久まで

みなとみらい句会

菅原　若水　報

於　横浜市社会福祉センター
令和7年12月7日

第四三〇回

AIに翻弄されし去年今年　金子　幸代
観覧車一周ごとの冬夕焼　里見　美季
新しき夢生む苦悩年の夜　菅原　若水
木の葉髪白黒グレーそして金　関根　洋子
やがてゆくいづれひとりの芒原　藤方さくら
皇帝ダリア姉は上からもの申す　芳賀　陽子
日向ぼこ頑固親父のゐぬ令和　三沢　容一
悴むや行列店への並び甲斐　吉村　元明

第四三一回

令和8年1月10日

雑煮椀独りの城に射す光　金子　幸代
元朝や新たな海に錨おろし　小林　基子
人日の手すり吊り革まだ硬し　里見　美季
人の日に立花党首提訴さる　菅原　若水
月面に人氷面のクレーター　関根　洋子
寒紅をきちんと付けて旅立ちぬ　田辺かつら
昭和百年生き延びる冬帽子　長島喜代子
老いの春ここまで来ればあとは運　藤方さくら
防人の歌が聞える梅白き　芳賀　陽子
繭玉や飾るも焼くも夢の中　増島　光月
謹んでゴミ出し奉行おらが春　吉村　元明
◎連絡先　菅原若水　s-jakusui@outlook.jpまで
ご一報ください。折り返し「句会へのお誘い」を
お送りいたします。

星川句会

金栗トモ子　報

令和7年12月1日

十二月

次郎柿出来ぬことより出来ること　大塚　真紀
風化せぬようバトンを渡す秋澄めり　桐山　芽ぐ
冬の夜ゆっくり崩すテラアート　里見　美季
値上りの天井知らず年の暮　菅原　若水
けいと玉使うあて無く仕舞いけり　藤原真理子
マフラーを巻いたとたんに冬の顔　原田由紀子
風呂吹きを吹く晩年の好奇心　長島喜代子
歳末のゴスペルソング誘導灯　町野　敦子
冬りんご噛めばシャキッと背筋伸び　横山　幸子
バラに刺ヒトに嘘ありクリスマス　金栗トモ子

一月　令和8年1月5日

初夢の不死鳥に跨っている　麻生　明
実千両の網にからみし鳩の脚　桐山　芽ぐ
着ぶくれてラガーの孫とハグしたる　栗原嘉一郎
伊勢海老の目が生きている迷い箸　里見　美季
寝正月今年の夢を見るまでは　菅原　若水
年新たいつものようにコーヒーを　藤原真理子
箱根路を神駆け抜けて寝正月　原田由紀子
一本の鞭老体の冴え返る　長島喜代子
冬夕やけ地球丸ごと染め上げよ　横山　幸子
暁の出勤鵞(ノスリ)お前もか　町野　敦子
砂利踏みし音も道づれ初詣　金栗トモ子

十一月・未掲載分

裏山は丸みを欠いて鵙の声　里見　美季
◎連絡先…事務局佐藤久まで

川崎句会

山田ひかる　報

於・川崎市総合自治会館
令和7年12月20日（土）

十二月

冬波がとぷんと縮む防波堤　麻生　明
落ち葉踏む音に奮うや車いす　安藤　均
ボロ市の破れし古布は宝もの　甲斐　泰子
大嘘どこに消えたかわだかまり　加賀田せん翠
いのこずちつけて長袖長ズボン　川島由美子
冬ぬくし電車ながめる群雀　齋藤佳代子
山寺や時雨る坂に膝笑う　佐伯　悦子
顔見世や弁天小僧の長煙管　佐藤　廣枝
初めてのビタミン注射冬夕焼　白井千代子
防衛も戦のひとつ開戦日　菅原　若水
いつになく長湯をしたる冬至の夜　関戸　信治
長風呂や湯ざめ案じて声を掛け　中原なおみ
長いものに巻かれてみるか冬の空　花澤ちいこ
料理の話よく聞きし日よ憲吉忌　吉居　珪子
ポインセチアしっかり伸ばす膝の裏　山田ひかる

一月　令和8年1月17日（土）

初暦日出づる国に飽きている　麻生　明
喜寿祝いそろりと食むや雑煮もち　安藤　均
御降りをうつすら肩に友笑ふ　甲斐　泰子
はや三日家族近くて遠きもの　加賀田せん翠
初参り大黒天のどっしりと　川島由美子
大旦何をしたとて「初」のつく　齋藤佳代子
どんど焼けがれも燃やし大空へ　佐伯　悦子

しのばせば猫にぶつかる春炬燵　佐藤　鈴代
靴跡を拾いつ通る雪の朝　佐藤　廣枝
去年今年富士より高き駄句の山　菅原　若水
医者通いばかり増えたり去年今年　関戸　信治
初場所や谷町なりし友の父　中原なおみ
初日の出大きなことを言ってみる　花澤ちいこ
松過ぎの朝特大の目玉焼　三沢　容一
寒の水飲んで齢を吹きとばす　吉居　珪子
雪吊に黒松の幹畏まる　山田ひかる
◎連絡先　事務局佐藤久まで

丹沢句会　竹村　半掃　報

順不同・秦野市西公民館

十二月

枕辺にそっと置き配クリスマス　星　一義
ミステリーに深入りしたる枯野原　加藤かほる
煤逃げや同志の集ふコーヒー屋　北村　文江
金目鯛涙目で見てる人の欲　杉本　秦空
母遺すあられに切った餅揚げる　飯田美枝子
黒玉子こつんと冬に突き当たる　尾崎　竹詩
焼芋の新聞ガザが燃えている　篠崎　妙子
猛吹雪二座ス不知火ノ女ナリ　與　起
ガス室を学びしわれら十二月　須田　聡子
温泉に齢預けし小夜時雨　田畑ヒロ子
あそぶこもきいろにそまるいちょうのき　羽田　勝二
落葉掻記憶の層を寄せ集む　佐々木重満
ペタペタと飛んで師走のヘリの空　酒井　天敏
推敲の足りぬ落葉が風に舞う　長谷川昭放
綿虫にぶつかりさうに道避ける　立石　采佳
上野駅なつかしさうや雪女　岡本　保
ＡＩ俳句進化やまずや漱石忌　澁谷　徹
黄昏や不意に飛び立つ庭落葉　加藤　三眠
花八手井戸端会議のように咲く　芳賀　陽子
凩を乗せた電車が駅に着く　竹村　半掃

一月

アンビシャスとっくに忘れた雑煮喰う　篠崎　妙子
寒の入り錠剤一粒遁走す　加藤かほる
一湾に初春（はる）を呼びこむ鳶の笛　澁谷　徹
シクラメン影の赤さの盛りなり　田畑ヒロ子
大国の髑髏剥き出し冬ざるる　佐々木重満
麻酔薬苦し抜歯の器具の冷たさよ　尾崎　竹詩
懸大根南無阿陀仏南無大師　長谷川昭放
日向ぼこダリの時計の如くなる　加藤　三眠
大嘘物の怪飛ばす四畳半　菅沼とき子
寒波急地球に貼りし絆創膏　北村　文江
固きもの噛むは御法度寒きびし　立石　采佳
初糶の鮪五億の平和ぼけ　岡本　保
初漁や潮かけて解くもやい網　酒井　天敏
風花や座敷わらしの髪を梳く　須田　聡子
しんねんをしずかにいわふふたりだけで　羽田　勝二
山火事はあの山道のあのあたり　飯田三枝子
寒卵ひとつひとつに罪と罰　竹村　半掃
◎連絡先…長谷川昭放
080・5013・6618
Kumonomine100ku@mk.scn-net.ne.jp

湘南サンシャイン句会　堀口みゆき　報

於・藤沢市市民活動センター二階会議室

一月　令和８年１月９日（金）一時～

紙漉女湯浴みの嬰（やや）を抱く如く　青木　敏行
寝正月生きているかとメール来る　青柳　白芳
謙遜の過ぎたる人の初電話　荻野　樹美
コンドルが見下すアスカの地上絵　金栗トモ子
定型詩　鶴行キ　紙ノ舟ガ往キ　塵
大根をつつむ地方紙地震の記事　芳賀　陽子
小春日や欄干に鳩丸くいる　日置　正次
唇を噛む癖今も初みくじ　保里よし枝
父の折る紙飛行機や初御空　みほ　はな
寒空や笑つた八重歯が暖かい　室伏くるみ
畳紙母の選びし春着かな　山口　愛子
白菜をゴロリと包む新聞紙　山下　遊児
ギリギリと大地歯を剥く霜柱　吉田半夏生
松飾り朝日の中に外さるる　堀口みゆき
◎連絡先　堀口みゆき
miyuhoriguchi@yahoo.co.jp
電話　０９０　３９１４　０５６８

インターネット句会　宮永　武彦　報

十一月

こだわりを脱いで落葉と露天風呂　石川　夏山
足元はサッカーシューズ七五三　光田久美子
秋霖や百年越しの墓じまい　木下　研作
ねこじゃらし愉快々々と枯れつくす　石鎚　優
菊日和白杖の歩の迷いなく　江原　文
廃屋の屋根の歳月秋深し　瀬古　修治
顔見世やをんな見惚れる女形　吉村　元明
ヒタヒタと変わる何かが熊を押す　岩田　六川
銀杏落葉　微分積分の静けさよ　佐々木重満
秋暑し二人羽織りの顔くずれ　町野　敦子
吟行や腰に熱燗ぶらさげて　柳　蒼柳
銀杏散るいのちの嵩と思うかな　平田　薫
冬晴や富士を撮らんと歩道橋　るう
秋うららチーズケーキを焼く時間　遠藤　美緒
毒ある草食べられる草冬ざるる　桐山　芽ぐ
ピラカンサ赤き実に触れ棘に泣く　須藤　節子
停戦といふ冬晴れの儚さよ　菅原　若水
人体も山も傾くそぞろ寒　麻生　明
秋の蝶うかと飛んではゐられまい　多久島重宏
寒の通院ご褒美に江ノ電へ　宮永　武彦

十二月

マフラーに顔をうずめて単語帳　光田久美子
来年は水母のように生きるのだ　石川　夏山

縁側の足踏みミシン散り紅葉　吉村　元明
時雨るるや更地となりし友の家　瀬古　修治
ひと葉落つ命燃やせし役者の死　渡辺　順子
古暦叶わぬ計を持ち越しに　須藤　節子
青空とリスと皇帝ダリヤかな　平田　薫
細則のルーペを外し冬の月　町野　敦子
冬落暉ゆっくり向かう祖国なり　岩田　六川
天日干す大根棚や三浦浜　木下　研作
冬ざれの低き世界を走り抜く　るう
開戦と終戦昭和の煤払い　金栗トモ子
舞う姿白拍子かな冬の鷺　佐々木重満
ほのぼのと君ほゝゑむや花八ツ手　石鎚　優
山の端も吾も橙色まとひ　遠藤　美緒
冬ざれやパラパラと撒く残り飯　桐山　芽ぐ
言ふことを聞かぬ落葉に覚えあり　多久島重宏
水涸れて地下の水音時刻む　菅原　若水
冬の夜窓に映った顔も笑った　麻生　明
棄てられて人形無口冬の雨　宮永　武彦

一月

獅子舞の一団去りて空青し　桐山　芽ぐ
念入りに足裏ほぐし寒に入る　光田久美子
この国の輪郭の無い福笑い　岩田　六川
狐火が示すこの世の非常口　石川　夏山
初富士の地平や馬のやさしき目　石鎚　優
腹筋し古稀の女に春近し　須藤　節子
落葉踏む音に振り向く音の主　瀬古　修治
去年今年スマホがスマホを呼んでいる　町野　敦子
去年今年夢の欠片をこぼしつつ　菅原　若水
初御空の底に干戈の影息(やす)むや　佐々木重満
種切れの父の手品の冬帽子　江原　文
須佐之男の刃こぼれの剣冴ゆるかな　金栗トモ子
看病の甲斐のなきしか寒見舞　木下　研作
いそいそとロングスカート初鏡　遠藤　美緒
七重八重墨絵装ふて山眠る　多久島重宏
昭和百年 余韻こもごも除夜の鐘　吉村　元明
裸木や昨日は黒い猫がいた　平田　薫
図らずも冬の電飾残業中　るう
大寒のいよいよ広き空を着よ　麻生　明

◎どなたでも。参加者募集中。登録・参加は無料。（初回参加はアカウント作成が必要ですので、お問合せください）
連絡先　宮永武彦　takehikom0410@gmail.com

磯子凪句会　尾澤　慧璃　報

令和7年11月26日

十一月

小春日や腕に捉まる抱つこちやん　瀬崎　良介
抱擁の小春のダンスタンスにゴン　鹿又　英一
香りごと赤子抱きたる柚子湯かな　尾澤　慧璃
変はらないなんて嘘でしよ返り花　佐藤　久
くたびれし勤労感謝の日の国旗　川野ちくさ
枕辺に抱つこ紐置く寒夜かな　池田恵美子
紫の好きなる波郷竜の玉　長濱　藤樹
かまきりの卵十一寒旱　藤田　ゆい
角打ちの濁酒ためす冬日和　木下　研作
遠灯りの一輌列車小夜しぐれ　桐　まり花
黄落を駆け抜けてゆくランドセル　岩田　六川

令和8年1月28日

一月

福豆やいつの間にやら声変はり　瀬崎　良介
寒見舞ひ家族名義で届きたり　岩田　六川
寒月や指を切りたる紙の端　川野ちくさ
賽銭箱にひしめく夢や初御空　桐　まり花
新聞の配達の音寒鴉　木下　研作
俳人に変人多し梅の花　鹿又　英一
冬麗の白きポスター上野駅　佐藤　久
変はりゆくみなとみらいや出初式　池田恵美子
変身と叫ぶ幼子春隣　尾澤　慧璃
ブルゾンや昼カラオケの指定席　長濱　藤樹

◎会　場　横浜市社会教育コーナー研修室C（JR磯子駅より徒歩4分）
◎日　時　奇数月の第4水曜日　13時～
◎連絡先　尾澤　慧璃　kinglovestea@gmail.com

金八句会　杉　美春　報

十二月

枝豆や天下国家も指の先　中村　光男
小春日や母親達のランチ会　松浦　泰子
陣馬山真っ赤に燃える鰯雲　村上　裕也
笙の音や能楽堂の床冴ゆる　杉　美春
実南天七難かくす笑い皺　神谷　純子
しばらくはこれで勘弁おでん鍋　里見　美季
熟れ柿や茅葺民家の千把こき　扇　義人
空港のオイスターバーの椅子高し　栗林　浩
鳥を呼ぶたわわの柿に夕日射す　石鎚　優
廃業のとぎ屋の玻璃戸冬の月　佐藤　久
黄落のうさぎ専用ホテルかな　尾澤　慧璃

一月

初日さす水平線や句友ら来　石鎚　優
墨染の二人分け入る初山河　杉　美春
声たかく一丁締めの大晦日　神谷　純子
寒波来るそろそろ切れる鎮痛剤　なつはづき
幼子のへのへのと書く雪の窓　松浦　泰子
日脚伸ぶ絵文字のインカ農事暦　扇　義人
縛られて寒菊の息吹き返す　里見　美季
鏡餅鑿と金槌揃えおり　村上　裕也
着ぶくれてハチ公前の人となる　中村　光男
初夢や獏並びたるバイキング　佐藤　久
末つ子のいつもお下がり毛糸玉　尾澤　慧璃
いつものところにゐるひとをらず米(よね)こぼす　栗林　浩

◎毎月第二金曜日　夜八時より。ZOOM使用。
◎事前投句（第二木曜日）
◎連絡先　杉美春　miharusugi@jcom.home.ne.jp

湘南ブロック吟行報告

山下　遊児　記

日　時　令和七年十二月五日（金）
吟行地　藤沢駅周辺
句会場　ル・クラシック
講　演　小野華那子氏
　　アルパの演奏とトーク

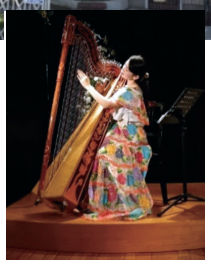
小春日和と呼ぶにふさわしい天候の中、尾崎名誉会長の挨拶で句会はスタートした。

会場は閑静な鵠沼の住宅街の中に突然ヨーロッパの屋敷が現れたような佇まいの「ル・クラシック」である。よく見かけるグランドハープを小さくしたような楽器「アルパ」を華奢な腕と指先で弦を爪弾く、奏者の小野華那子氏の姿は、小さな白鳥の羽搏きにも見えた。音質も軽やかで会場はうっとりとした雰囲気に包まれた。殊に「きよしこの夜」を全員で合唱した時は教会の中に紛れ込んでしまったかのような錯覚に陥ってしまった。

夢のような時間が終わっていよいよ清記用紙が配られて選句が始まった。披講は、はなさんと吉田半夏生さんが担当。

選句が終わり尾崎名誉会長・内藤・田畑・佐々木各副会長と佐藤事務局長・堀口みゆきさん及び山下事務局次長が講評した後に芳賀会長より成績の発表がなされた。参加者数は五十名と予想を超える結果となった。

（会場　ル・クラシック）



（小野華那子氏）

入賞十五位まで

古民家の土間にどかんと冬がゐる　山下　遊児
落葉踏む盲導犬の眼のしづか　堀口みゆき
アルパ弾く白き腕から冬の詩　金栗トモ子
冬来たる鏡のような空一枚　尾崎　竹詩
江の島を持ち上げている寒の晴　佐々木重満
天平の色と思ひし柿落葉　山口　愛子
捨ててこそ力溜めゆく枯木かな　土屋　良夫
又ひとつ老舗の消えし師走かな　生田　暁美
凩や行き場うしなふ大伽藍　河村　青灯
薪小屋や落葉つけたる竹ぼうき　増井　智子
冬紅葉煩悩数多降りしきる　芳賀　陽子
海という幼なじみや冬ぬくし　は　な
ビルの間に富士を探すや十二月　丹羽　寒國
柔らかきあいさつ交わす落葉道　宮永　武彦
ポケットに喉あめさぐる冬の街　馬来まち子

以上　入賞おめでとうございました。

春の一句

撮影：里見美季

風光る園児二度目の水を飲む　日置　正次
馬力かけうまい句成せり春兆す　長谷川きよ志
寒明の浪聴いてゐる足裏かな　猪狩　鳳保
無音とは寂の遊び場なごり雪　中山　妙子
駄菓子屋の笊に落花の二三片　宮永　武彦
春を舞ふ姫新しきトーシューズ　横川はっこう
残雪や「この道行き止まり」と書かれ　石鎚　優

＝地区動向・消息＝

1．1月7日（水）会計監査
2．1月14日（水）役員会・拡大幹事会
令和7年度事業報告・収支報告、令和8年度事業計画・予算案、組織・役員改正案、総会役割分担、令和8年度俳句大会実行委員長選出、創立45周年記念行事について、他
3．新会員紹介《会　友》
　梅津大八（横浜市）　上野五十鈴（横浜市）
　上野りな（横浜市）
4．逝去謹悼
　北村千代子（横浜市）　令和七年十一月
　鈴木句秋（横浜市）　令和七年十二月
　西野洋司（藤沢市）　令和八年一月
　村上友美（横浜市）　令和八年一月
　佃　悦男（小田原市）　令和八年一月

★お知らせ
令和八年度俳句大会は、十一月二日（月）に開催します。詳細は、同封の作品募集をご覧ください。

《編集後記》

○神奈川県現代俳句協会創立四十五周年を記念し「湾岸大賞」を募集します。詳細は6頁。
○会報172号では「夏の一句」を募集します。編集人までご投句ください。

発行所　神奈川県現代俳句協会
発行人　芳賀　陽子
編集人　杉　美春
〒252・0325
相模原市南区新磯野4-4-1-506
電話　090・6534・1452
Eメール　miharusugi@jcom.home.ne.jp
事務局　佐藤　久
電話　090・6587・0113
Eメール　hisashi36@fj9.so-net.ne.jp
印刷所　㈲湘南グッド